



## 愛川ふれあいの村 11月の風景

# 平成29年 11月 自然のたより

村の景色は秋を過ぎて冬支度。イチョウの葉は黄色いじゅうたんのように道を彩り、モミジの赤は陽の光に照らされて、一層鮮やかに見えます。サザンカは白とピンクの花をつけ、葉の濃い緑がまた美しい。11月も様々な色に囲まれて、生命と季節の移り変わりを感じることが出来ます。



イロハモミジ



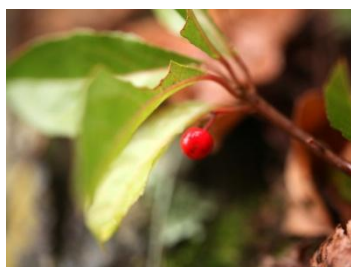
サザンカ



ナラタケ



ロゼット模様



ヤブコウジ



ベニバナボロギク



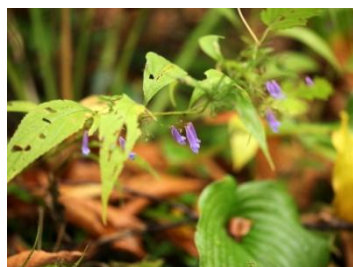
ニガクリタケ



キツネノロウソク



カンアオイ



セキヤノアキチョウジ



ゲンショウジの種飛ばし



落ち葉で風除け



シロダモ



フバセゴケの無性芽



ホヒラタアブ とホヒラタスズ



## ◆ススキ◆ ～植物の役割～

9月号のトピックスで「秋の七草」について書きましたが、今回はその中の一つ『ススキ（尾花）』をご紹介します。

落葉樹が紅葉して葉を落とし、着々と冬支度をすすめているこの時期、日当たりのよい草むらでは背の高いススキがよく目立ちます。

ススキは、古くから日本にあるイネ科の多年生植物で、7月～10月にかけて花を咲かせ、種子をまきます。また地下茎で繁殖する植物でもあるため、地上部分が枯れても年々株が成長していき、放っておくと草原になります。草原は木が育つ土壌を作る上で重要な役割を担っています。土は、ススキなど多年生植物が育っては枯れることを繰り返すことで、大きな木が育つための栄養が蓄えられ、後に森林へと遷移します。

現代ではやっかいな雑草として除去されてしまいがちですが、昔は人が生活する上で欠かせない植物でした。“茅（かや）”とも呼ばれたように、茅葺屋根（かやぶきやね）の材料という重要な役割を担っており、農村では集落に“茅場”と呼ばれるススキの草むらがあったほどです。他にも、ぞうり、ほうき、縄、家畜のえさなど、様々なものに活用されていました。

日本各地にたくさん生え、雑草として刈られてしまうススキを利用しない手はありません。ススキの新たな活用方法を見出せると“宝”の山となるかもしれませんね。（梅本）



## ★生きていくために★

寒い季節、食べ物が少なくなり攻撃的になるスズメバチ。ある日、自分の体よりも大きなコガネムシを捕らえている場面に遭遇しました。持って飛ぼうにも、コガネムシが重たくてなかなか飛ぶことが出来ません。そのため、強力な顎を器用に使いコガネムシを団子状します。

10分ほど格闘した後、巣の方へ飛び立って行きました。寒くなり餌を選べない状況の中で、昆虫も生きていくために必死なのですね。

（塚原）



## ★山椒第4弾 かなざんしょう 粉山椒★

山椒は、葉（木の芽）・花・実・『粉山椒』と1年をとおして食することができます。

最後のお楽しみで食するのは『粉山椒』。熟した実の皮が2つに割れ黒い種が出てきます。黒い種を除き、皮をよく乾燥させ、すりつぶしたものが『粉山椒』です。山椒の香り、辛さは食欲を増進し食材の臭みをとる効果があります。

そのため、うなぎのかば焼きに振りかけて食べると臭みも取れ最高です。（菅原）



## ◎十二月の

### 注目ポイント◎

木枯らし一号が吹き冬の気配を感じる季節になりました。立冬を過ぎ黄葉したイチョウや紅葉したイロハモミジの葉は、役目を終え滑空したり舞いながらどンドン落葉し見ているも楽しいです。落葉が終わると辺りの見通しがよくなり野鳥観察に最適な季節になりました。

この時期は、北の国から渡ってくるジョウビタキ、ルリビタキ、シメ、ツグミなどがよく観察されます。双眼鏡一つ持って自分のフィールドに出かけて見ましょう。

「ヒツヒツヒツ、カタカタ」と澄み切った鳴き声と、軽くお辞儀をするような仕草が特徴のジョウビタキは冬鳥の代表でよく見られます。スズメぐらいの大きさにもかかわらず北の国から渡ってくるその力に驚かされます。自分のフィールドは皆のフィールドでもあります。観察することと同時にそれを保護するフィールドマナーも大切です。（吉田）



▲ジョウビタキ♂

発行者：神奈川県立愛川ふれあいの村

TEL：046-281-1611 HP：<http://fureai-aikawa.com/>

写真：吉田文雄・塚原教弘・石川雄馬・菅原妙子・梅本恭代

文章：吉田文雄・梅本恭代・塚原教弘・菅原妙子

編集：吉田文雄・石川雄馬・渡部秋人



愛川ふれあいの村で、検索★